『源氏物語』の動物の一考察

村松正明*
(e-mail：mula@sunmoon.ac.kr)

目　次

1．はじめに
2．『源氏物語』に見える動物
3．紫の君と雀
4．女三の宮と唐猫
5．夕顔・浮舟と狐
6．おわりに

1．はじめに

『源氏物語』には「空蟬」や「胡蝶」のように、巻名として動物が用いられており、本文には、馬・猫・狐・鹿などの獣類や、鶯・雁・時鳥・雀などの鳥類、それに蛍・蝶・蜩・鈴虫などの虫類、氷魚などの魚類や、竜などの想像上の動物など、多種多様な動物が登場する。これら動物は、植物とともに、各々の場面の季節感や情趣を醸し出す重要な要素となっており、各場面に立体的な奥行きをもたらすばかりではなく、作中人物たちの心情にも少からず影響を与えており、彼らの心情を象徴的に表したりもする。

『源氏物語』に見える動物の研究史を概観すると、先ず、喜多義勇氏が伝統的な景物としての動物について考察を行ない、竹岡哲子氏は哺乳類や鳥類・虫類について、『枕草子』と比較しながら考察した。また高嶋和子氏は数多くの動物について、物語の筋を追いつつ詳細に整理し、三苫浩輔氏は巻名に見える動物について、民俗学的に魂との関係を考察した。更に、葛綿正一氏は紫と君と雀、女三の宮と猫について、作中人物が動物へと生成変化する場面を中心に考察した[1)]。

＊鮮文大学校　日語日本学科　教授

www.kci.go.kr

本稿は、動物が登場する場面の中でも、葛綿正一氏が考察したように、特に人が動物に、あるいは動物が人へと変貌したかのごとく読みとれる場面について考察することにする。そこでは、動物が登場人物の単なる比喩や象徴として描かれているのではなく、あたかも動物と人とが二重写しになっているかのごとく読み取れるのである。それは若紫巻の光源氏が垣間見する場面における、紫の君と雀、それに若菜上巻の柏木が垣間見する場面における、女三の宮と唐猫である。また、人が動物に変貌したかのようには描かれてはいないが、人間に化けて騙すと信じられていた狐についても考察することにする。それは夕顔巻の光源氏が夕顔の宿に通う場面や、廃院で物の怪が夕顔を取り殺す場面、それに手習巻の僧都が宇治院で浮舟を発見する場面である。

なおテキストは、新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）を用いた。

2．『源氏物語』に見える動物

『源氏物語』には、巻名として「空蟬」「胡蝶」「蛍」「鈴虫」などの動物が用いられている。「空蟬」は巻末の光源氏と空蟬の歌によるもので、「胡蝶」は紫の上と秋好中宮の贈答歌によっている。また「蛍」は光源氏が蛍を放って蛍兵部卿宮に玉鬘の姿を見せたことや、玉鬘の歌によるもので、「鈴虫」は女三の宮と光源氏との贈答歌によっている。このように巻名に用いられている動物は何れも昆虫であり、全て巻中で詠まれた歌による命名である。

動物の名が作中人物の名として用いられている例は、「空蟬」と「蛍宮」、「雲居雁」の三例だけである。「空蟬」の呼称は巻末の光源氏と空蟬の歌によるもので、「空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな」（空蟬1-p.131）と、我が身を蟬に託して詠んだ空蟬の歌のように、光源氏の執拗な求愛を拒み続けながら、木陰に忍び泣く人妻のイメージを表している。「蛍宮」の呼称は光源氏が放った蛍の光で玉鬘の姿を見たことによるもので、源重之の歌「音もせで思ひにもゆる蛍こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ」（『後拾遺和歌集』夏-216）で、鳴き声を立てず思いの火に燃える蛍が詠まれているように、蛍の光は玉鬘への燃える情念を象徴していると言えよう。また「雲居雁」の呼称は夕霧との仲を裂かれて、「雲居の雁もわがごとや」（少女3-p.48）と、一人口ずさんだことによるものである。夕霧との仲を東宮に入内させようとする父によって裂かれた雲居雁は、哀愁を伴った雁の鳴き声に思い乱れ、雲のかなたの雁に我が身をなぞらえて口ずさんだのである。

本文の中には、獣類として、馬(58)・猫(19)・狐(12)・鹿(12)・牛(3)・犬(2)・狼(2)・鼬(2)などが、鳥類として、鶯(22)・雁(17)・時鳥(11)・水鳥(7)・鶴(5)・水鶏(4)・鷹(4)・千鳥(4)・鴛

1）喜多義男「源氏物語と動物」（『日本文学研究資料叢書　源氏物語Ⅰ』有精堂、1969）
竹岡哲子「源氏物語に於ける動物」（『国文鶴見』6、鶴見女子大学日本文学会、1971.3）
高嶋和子『源氏物語動物考』国研出版、1999
三苫浩輔「源氏物語巻名に見える動物」（『沖縄国際大学文学部紀要・国文学篇』9-2、1981.1）
葛綿正一「源氏物語の動物」（『源氏物語講座』5、勉誠社、1991）

www.kci.go.kr

鴦(4)などが登場する。また虫類として、蛍(9)・蝶(9)・蜩(8)・蟬(6)・鈴虫(6)・松虫(4)・蜻蛉(3)・蜘蛛(3)などが、魚類として、氷魚(2)・鮒(1)・鮎(1)などが登場する。更に、竜(1)や象(1)のように想像上の動物も登場する2)。この中から幾つかの動物を取り上げて見てみることにする。

獣の中では「馬」が最も多く登場する。馬は主に乗り物として、特に人目を忍ぶ時や急用の時などに使われた。例えば、光源氏が夕顔を訪れる時や、頭中将が末摘花邸を訪れる光源氏の跡をつける時、薫や匂宮が宇治を訪れる時などに乗馬の場面が見られる。また馬は禄や贈り物としても用いられた。例えば、光源氏の元服の際に加冠役の左大臣が帝より馬を賜っている。なお「駒」は馬の歌語で、『枕草子』「歌の題は」でも、歌題の一つとして挙げられており、明石の入道の娘を訪れる途中、光源氏は紫の上のことを恋しく思いつつ「秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居をかけれ時のまも見ん」（明石2-p.255）と、思わず独り言を漏す。「つきげ（月毛）」は鴇の羽のように赤みのある毛色のことで、光源氏は、紫の上の姿を一目見ようと、つきげの駒に空を駈けるように命じるのである。

「鹿」は『万葉集』の時代から「秋さらば今も見るごと妻恋ひに鹿鳴かむ山そ高野原の上」（巻1-84、長皇子）のように、妻を恋しがって鳴く声が歌に詠まれてきたが、特に「奥山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき」（『古今和歌集』秋上-215、読人しらず）のように、秋の悲しさを深く感じさせるものとされた。また鹿は「秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の遥けさ」（『万葉集』巻8-1550、湯原王）のように、萩と取り合わせて詠まれたりもした。『源氏物語』では、例えば、光源氏は、山鳥がさえずりあい、花々が錦を敷いたような北山を、「鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、なやましさも紛れはてぬ。」（若紫1-p.219）と、鹿が歩く姿を見て、次第に煩悶が払拭される。

鳥の中では「鶯」が最も多く登場する。鶯は春を告げ、花を愛する鳥で、『古今和歌集』の仮名序では「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」と、歌を詠むものの例として鶯と蛙が挙げられている。『源氏物語』では初音巻で、明石の君と姫君とが「～鶯の初音きかせよ」、「～鶯の巣だちし松の根を～」（初音3-p.146）と歌をやり取りしており、姫君を思う明石の君の親心と、母を慕う姫君の心が、鶯の声に託されて響き合っている。また若菜上巻では、柏木が「いかなれば花に木づたふ鶯の桜をわきてねぐらとはせぬ」（若菜上4-p.146）と、女三の宮を「桜」に喩え、光源氏を「花に木づたふ鶯」、即ち、女性から女性へと渡り歩く鶯に喩えて、女三の宮への愛情が薄い光源氏を批判する。

「雁」は、秋に北国から飛来して春に帰る渡り鳥で、「白雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月」（『古今和歌集』秋上-191、読人しらず）や、「霧たちて雁ぞ鳴くなる片岡の朝の原は紅葉しぬらむ」（『古今和歌集』秋下-252、読人しらず）のように、しばしば月や霧と取り合わされ、また常世の鳥ともみなされた。『源氏物語』では夕顔巻で、夕顔の家に宿った光源氏が「白栲の衣うつ砧の音も～空とぶ雁の声とり集めて忍びがたきこと多かり。」（夕顔1-p.156）

2）林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房、2002、p.293

www.kci.go.kr

と、翌朝砧の音と雁の鳴き声を聞いて、秋の哀れさをしみじみと感じる。また須磨巻では、憂愁の日々を過していた光源氏は雁の鳴き声にわびしさが触発され、「初雁は～」「～雁はその世の～」「～なく雁を～」「～かりがねも～」（須磨2-pp.201～202）と、良清や惟光、右近将監らと歌を唱和しつつ孤独を慰める。

「時鳥」は、四月は山里で忍び鳴きをし、五月に人里に飛来して鳴くとされていた鳥で、「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今和歌集』夏-139、読人しらず）や「わが屋戸の池の藤波咲きにけり山郭公いつか来鳴かむ」（『古今和歌集』夏-135、読人しらず）、「ほととぎす我とはなしに卯の花の憂き世の中になきわたるらむ」（『古今和歌集』夏-164、躬恒）のように、花橘や藤の花、卯の花などと取り合わされて詠まれた。特に、その鳴き声は懐旧や思慕の情をかきたてた。『源氏物語』では幻巻で、紫の上を追慕する光源氏と夕霧が、花橘の香と時鳥の声にかきたてられて、「なき人をしのぶる宵のむら雨に濡れてや来つる山ほととぎす」、「ほととぎす君につてなんふるさとの花橘は今ぞさかりと」（幻4-pp.541～542）と、歌を詠み交わす。冥土に通う時鳥は、光源氏父子と亡き紫の上とを結ぶ媒介となっている。

虫の中では「蛍」が最も多く登場する。蛍は夏の代表的な景物で、先に引用した源重之の歌（『後拾遺和歌集』夏-216）や、「夕されば蛍よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき」（『古今和歌集』恋2-562、紀友則）のように、蛍の光は燃える思いに見立てられ、恋の情念を象徴するものとなった。『源氏物語』では蛍巻で、光源氏が一瞬の蛍火によって、玉鬘の容姿を求婚者の蛍兵部卿宮に照らし出して見せる場面がある。光源氏の思惑どおり、蛍兵部卿宮は魂が抜けたように感動し、「なく声もきこえぬ虫の思ひだに人の消つにはきこゆるものかは」（蛍3-p.201）と、燃える恋情を玉鬘に歌で訴える。

「蝶」は、春の歌語と考えやすいが、必ずしも春に限られたわけではなかったようである。特に花に群れ飛ぶ蝶を模した舞いに「胡蝶の舞」があり、『源氏物語』では胡蝶巻で、秋好中宮の春季の御読経に、紫の上が花を届けさせた際、「鳥、蝶にさうぞき分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を～」（胡蝶3-p.171）と、鳥や蝶の装束をした女童に、それぞれ銀の瓶に生けた桜と、金の瓶に生けた山吹を持たせ、仏に供花させる。そして鳥の装束をした女童は迦陵頻を舞い、蝶の装束をした女童は胡蝶を舞う。

「蜩」は、夜明けと夕暮にカナカナと哀愁を帯びた鳴き声をあげる蟬で、「萩の花咲きたる野辺にひぐらしの鳴くなるなへに秋の風吹く」（『万葉集』巻10-2231、読人しらず）のように秋の景物の一つであり、「ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし」（『古今和歌集』秋上-205、読人しらず）のように、山里の雰囲気を醸し出す。『源氏物語』では若菜下巻で、女三の宮と柏木の密事が露見する直前、にぎやかな蜩の声に目を覚ました光源氏が、女三の宮と蜩の歌を詠み交わす。蜩の声は密通事件発覚の前奏曲となっており、次第に「心さわがすひぐらしの声」（若菜下4-p.249）と、光源氏の心を掻き乱す声となっていく。また幻巻では、亡き紫の上を偲びつつ庭先の撫子を一人眺めていた光源氏が、「蜩の声はなやかなるに」（幻4-p.542）と、にぎやか

www.kci.go.kr

に鳴きしきる蜩の声を聞いて歌を詠む。蜩の声は光源氏の悲しみに拍車をかける役割をしている。

「松虫」と「鈴虫」は、秋の虫の代表であり、平安時代にはお互いの呼称が入れ替わっていたと言われる。鈴虫は「年経ぬる秋にもあかず鈴虫のふりゆくままに声のまされば」（『後拾遺和歌集』秋上-268、公任）のように、鈴を「振る」と、年が「経る」が掛詞として用いられ、松虫は「秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはむ」（『古今和歌集』巻4-202、読人しらず）のように、「松」と「待つ」が掛詞として用いられた。『源氏物語』では鈴虫巻で、出家した女三の宮に未練を抱いていた光源氏が、松虫と鈴虫について批評する。松虫については「いと隔て心ある虫になんありける」（鈴虫4-p.382）と、人見知りをして六条院では鳴かないことに不満を抱き、鈴虫については「鈴虫は心やすく、今めいたるこそらうたけれ」と、気安く陽気に鳴くことを推奨する。そして「おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたき鈴虫の声」と、鈴虫の声を女三の宮の美しい声になぞらえて、女三の宮への未練を歌に詠み込む。

このように『源氏物語』に見える動物は、植物とともに、場面の情趣を構成する重要な要素の一つとなっており、各場面に立体的な奥行きをもたらすだけではなく、作中人物たちの心情にも影響を与え、さらには彼らの心情をも象徴的に表していると言えよう。

3．紫の君と雀

雀は日本各地に広く分布する鳥で、褐色と白色の雑ざった羽毛をもち、顔に大きい黒斑がある通常の雀と、雄の頭が赤栗色で、顔に黒斑の無い「にゅうない雀」が棲息している。人里近くに棲む鳥で、地味で目立たないけれども、古来、人々によく親しまれてきた。雀は春と夏には一つがいごとに別れて、村落や市街地に巣を作り、秋と冬には大群をなしつつ田園で生活する[3]。

平安時代の法規『延喜式』（21・治部）を見ると、赤雀を上瑞、白雀を中瑞、五色の神雀と冠雀を下瑞と規定しており、奈良や平安時代に編集された六国史には、赤雀や白雀などが献上された記録が散見する[4]。また『古事記』では、天若日子の葬儀の時、「雀を碓女と為」と、雀は「碓女」（臼で米をつく女）として奉仕しており、これは鳥が霊魂の依代とされたこと、また鳥をトーテムとする氏族が葬儀に参加したことを示唆しているのだろう[5]。

『枕草子』「鳥は」には、「頭赤き雀」と、頭の赤い雀が挙げられているが、これは頭が赤栗色の「にゅうない雀」を指すものと思われる。また「うつくしきもの」として「雀の子のねず鳴きするにをどり来る」と、鼠の鳴き声を真似して呼ぶと、雀の子が踊るようにやって来る様子や、「へになどつけ

3）寺山宏『和漢古典文学動物考』八坂書房、2002、p.269

4）例えば『日本書紀』「皇極天皇、元年七月二十三日」には、蘇我入鹿の従者が白雀の子を捕まえたことや、ある人が白雀を籠に入れて蘇我蝦夷に贈ったことなどが記されている。

5）寺山宏、前掲書、p.271

www.kci.go.kr

てするたれば、親雀の虫など持て来てくくむるも、いとらうたし」と、雀の子を紐につないでおくと、親雀が虫を持って来て、子雀の口に含ませる様子などが挙げられている。さらに「心ときめきするもの」として「雀の子」が挙げられているが、それは孵化させて飼っている雀が無事に育つかどうか、心配と期待の入り雑じった気持からであろう。また源通親も「おもへただ雀の雛を飼ひおきて育つるほどはかなしきものを」（『夫木和歌抄』巻27・動物）6)と、雀の子飼いを歌に詠んでおり、当時、雀の子をペットとしてよく飼っていたものと推測される。

説話類では『今昔物語集』巻七「恵表比丘、無量義経渡震旦語第十三」が、無量義経によって忉利天に生まれ変わる青雀の話であり、『古事談』「実方、雀となりて殿上小台盤に帰る事」が、蔵人頭に任ぜられず、陸奥守になったことを怨んで雀に転生した藤原実方が、殿上の台盤を食う話である7)。また『宇治拾遺物語』巻三「雀報恩の事」は、子供に腰を折られた雀が、助けてくれた老婆に報恩するという話で、これが昔話「舌切雀」の原型となった。

『源氏物語』では、雀は、光源氏が紫の君を垣間見る場面にだけ登場する。瘧病を患った光源氏は、加持を受けるため、三月の末に北山の聖のもとに赴く。その折り、光源氏は北山の僧都の庵室に美しい少女を見い出す。

> きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、(1)白き衣、山吹などの萎えたる着て(2)走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、(3)いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、(4)顔はいと赤くすりなして立てり。
>
> 「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、(5)伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。このゐたる大人、「例の、心なしのかかるわざをしてさいなまるるこそいと心づきなけれ。(6)いづ方へかまかりぬる、(7)いとをかしうやうやうなりつるものを。(8)烏などもこそ見つくれ」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。
>
> 尼君、「いで、(9)あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く」とて、「こちや」と言へばついゐたり。
>
> (10)つらつきいとろうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。(11)ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。（略）幼心地にも、さすがにうちまもりて、(12)伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。
>
> (若紫1-pp.206～208)

二人の女房と女童が遊んでいるが、その中に十歳くらいで、白い単衣に山吹襲の上着を着た女

6) 源通親は平安末期から鎌倉初期の歌人で、勅撰集には『千載和歌集』以下に32首が採られている。『夫木和歌抄』は藤原長清撰の私撰集で、延慶3年(1310)頃の成立とされており、巻27に「雀」の題を立てて10首が収録されている。

7) 『今鏡』や『十訓抄』にも同話が収録されている。

www.kci.go.kr

の子は、他の子供たちとは比べものにならず、成長後の美貌が窺われる。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、顔は手でこすって赤くなっている。尼君が「何事か。子供たちといさかいをしたのか」と言って見上げた顔立ちに似たところがあるので、光源氏は娘かと思う。女の子は「雀の子を犬君が逃がしてしまったの。伏籠の中に入れておいたのに」と言って残念がる。女房は「あのうっかり者が、こんな不始末をして叱られるなんて、困ったものだ。雀はどこに行ったのでしょう。だんだん可愛らしくなってきたのに、烏などが見つけたら大変です」と口をはさむ。尼君が「何と子供っぽく、聞き分けが悪いですね。私が今日明日とも知れない命なのに、雀を追いかけているなんて。罰があたるといつも言っているのに、情けない」と言い、「こちらへ」と言うと、女の子は膝をついて座る。顔つきがまことに愛らしくて、眉のあたりがほんのりとして、あどけなくかき上げた額の様子、髪の生え際がとてもかわいらしい。これから成人していく様子を見届けたい人だなと、じっと見入っている。幼心にもさすがに尼君をじっと見つめて、伏し目になってうつむいているので、こぼれかかった髪はつやつやと美しく見える。

この垣間見の場面は、あたかも紫の君が雀の子に、或いは雀の子が紫の君に変貌したかのように語られていると言えよう8)。先ず、紫の君と雀の子の容貌であるが、(1)「白き衣、山吹」、即ち、白い単衣に山吹襲（表が薄朽葉、裏が黄色）の上着を着ていたが、これは腹が白くて羽が茶色い雀に似ており、しかも「萎えたる」、即ち、糊が落ちて柔らかくなった着物は、雀の羽毛の柔らかさにつながると言えよう。また、(4)「顔はいと赤くすりなして立てり」と、泣いて手でこすって赤くなった紫の君の顔は、頭が赤栗色の「にゅうない雀」、即ち、清少納言が好んだ「頭赤き雀」のイメージと重なる。さらに、(2)「走り来たる女子」という紫の君の疾走ぶりは、伏籠の中から走って逃げ出したであろう雀の子の疾走ぶりを想像させ、(3)「いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌」、即ち、光源氏が想像した紫の君の成長後の美貌や、(11)「ねびゆかむさまゆかしき人」と、成長していく様を見届けたいと光源氏に思わせた紫の君の姿は、女房が語った、(7)「いとをかしうやうやうなりつる」雀の子、即ち、だんだんと成長して可愛らしくなってきた雀の子の姿とつながっていると言えよう。

このように紫の君と雀の子の容貌には共通点が多いが、それだけではなく、両者は置かれた境遇までも類似している。親鳥と離れ離れになってしまった雀の子は、(5)「伏籠の中に籠めたりつる」と、鳥かごの代りに、本来香を焚き染めるのに使う伏籠の中に閉じ込められており、母を失った紫の君は、本来は父兵部卿宮に引き取られるべきなのに、父宮の代りに母方の祖母である尼君に庇護されていたのである。即ち「父兵部卿宮」が、紫の君が本来入れられるべき「鳥かご」に、「尼君」が、代用の「伏籠」に該当するのである。

こうした容貌や境遇の類似点によって、まるで紫の君と雀の子が同化したように読み取れるのであるが、実はそればかりではなく、後の物語の展開を暗示しているようにも読み取れる。例えば、女房

8) 葛綿正一氏は「物語の水準で言えば、語り手によって光源氏の視点から語られる紫君の疾走ぶりと、紫君によって語られる雀の疾走ぶりとはあくまでも別ものであって、一方が他方の比喩や象徴であるともいえない」としながらも、「走り抜ける雀＝紫君。そして紫君と雀の子が重なり始めるやいなや、テクストはその生成変化をとめどなく肯定していく」と述べている。前掲書、p.180

www.kci.go.kr

の、(6)「いづ方へかまかりぬる」と、雀の子の行方を案ずる言葉は、紫の君が行方不明になったことを父兵部卿宮に告げる場面を先取りしていると言えよう。紫の君は、父兵部卿宮に引き取られる前夜、光源氏によって二条院に引き取られたが、父宮が紫の君の行方を尋ねるや、光源氏が厳重に口止めしていたので、亡き尼君邸に残った女房たちは「行く方も知らず、少納言が率て隠しきこえたる」（若紫1-p.260）と、少納言が勝手に連れ出して、行方をくらましたと答えるのである。また、垣間見の場に居合わせた女房は、(8)「烏などもこそ見つくれ」と、雀の子が烏にでも見つかったらと懸念するが、これは紫の君（雀の子）が、光源氏（烏）の視線にさらされた垣間見を示唆すると同時に、雀の子が烏にさらわれるように、紫の君が光源氏に略奪されて二条院に引き取られる事件をも暗示していると言えよう。

なお、紫の君の行く末を心配した尼君は、(9)「あな幼や」と紫の君を叱り、光源氏は、(10)「つらつきいとろうたげにて」と、紫の君の顔付きを愛らしいと思うが、このような紫の君の無邪気な幼さや可愛さは、雀の子の幼さや可愛さと一致しており、心配のあまり泣き出す尼君を見つめて、(12)「伏し目になりてうつぶしたる」と、しおれた紫の君の様子は、伏籠の中に閉じ込められていた雀の子の様子を髣髴させる。

紫の君と雀の子は容貌や境遇が類似しており、あたかも紫の君が雀の子に、雀の子が紫の君に変貌したかのように語られている。しかも、犬君が伏籠の雀の子を逃がしてしまった事件は、尼君邸で保護されていた紫の君が光源氏によって盗み出される事件の暗示とも読みとれるのである。

4．女三の宮と唐猫

日本には古くから野生のヤマネコもいたらしいが、奈良時代のはじめごろ渡来したイエネコが飼育されるようになった。その渡来とは、中国から仏教伝来の際に、経典をネズミの害から守るためにネコが添えられてきたことを指す[9]。

平安時代の記録や物語などには宮中や貴族の屋敷で飼われた猫の話が見えるが、猫は主として女性の愛玩動物として登場する[10]。例えば『枕草子』「猫は」には、「猫は、表のかぎり黒くて、腹いと白き。」と、作者が背中の黒くて、腹の白い猫を好んだことが記されており、また「うえに候ふ御猫は」には、「うえに候ふ御猫は、かうぶり給はりて、命婦のおとどとて、いとをかしければ、かしづかせたまふが、～」と、一条天皇の傍で飼われていた猫が五位に叙せられ、「命婦のおとど」と呼ばれて大切に養われたことが記されている[11]。さらに「なまめかしきもの」には、「簀子の高

9）鈴木日出男「猫」（『国文学　古典文学動物誌』学灯社、1994.10）p.16
寺山宏氏は、猫が平安時代に渡来したとしている。前掲書、p.354

10）島内景二「ねこ」（秋山虔編『王朝物語辞典』東京大学出版会、2000）p.335

11）「命婦」は五位以上の女官の称で、「おとど」は婦人の敬称である。

www.kci.go.kr

欄のわたりに、いとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、いかりの緒くひつきて、引きありくも、なまめいたる。」と、赤い首綱に縛られた猫が簀子の高欄の辺りを歩く優雅さが描かれている12)。

また『夫木和歌抄』（巻27・雑9）には「猫」と題して三首の歌があげられているが、そのうちの一首が花山天皇の御製の「敷島の大和にはあらぬ唐猫を君がためにぞもとめいでたる」である。詞書に「三条の太皇太后宮より猫やあるとありしかば、人のもとなりしがをかしげなりしをとりて」とあるが、「三条の太皇太后宮」は、父冷泉天皇の后だった晶子内親王のことで、義母から猫を依頼された花山天皇は、和猫ではなく、当時特に珍重された中国伝来の「唐猫」を奉ったのである。

当時、輪廻思想は一般的なものだったようで、『更級日記』には人が猫に転生した話が記されている。孝標女が愛育していた猫が、姉の夢に現れ、自分は先年亡くなった侍従大納言（藤原行成）の姫君であると告げるや、孝標女は姫君が猫に転生したものと信じこみ、大切に世話をした。また年を経た猫は「猫又」となり、人を食うと信じられていたようで、『徒然草』（89段）には「『奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる』と、人の言ひけるに、『山ならねども、これらにも、猫の経あがりて、猫またに成りて、人とる事はあなるものを』と言ふ者ありけるを～」と、年を経た猫が猫又となって人を食う話が記されており、『古今著聞集』巻17「観教法印が嵯峨山庄の飼唐猫変化の事」には、飼っていた唐猫が秘蔵の守り刀をくわえて逃げるや、人々はその猫を「魔の変化」かと思うという逸話が記されている。このように猫に対しては、恐ろしい魔物のイメージも抱いていたようである。

『源氏物語』では蹴鞠の場面に猫が登場する。光源氏の四十賀や明石女御腹の皇子の産養など、晴の儀式も一段落した頃、桜花の咲き乱れる六条院の庭で蹴鞠が催され、夕霧や柏木も参加する。その時、女三の宮の飼っていた唐猫が大きな猫に追われて、御簾の下から走り出る。唐猫の首につけた紐が御簾に引っ掛かり、御簾がまくれあがってしまう。はからずも御簾の傍で蹴鞠を見物していた女三の宮は、立ち姿を柏木にさらしてしまう。

> 御几帳どもしどけなく引きやりつつ、人げ近く世づきてぞ見ゆるに、(1)唐猫のいと小さくをかしげなるを、(2)すこし大きなる猫追ひつづきて、(3)にはかに御簾のつまより走り出づるに、(4)人々おびえ騒ぎてよそよそと身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしがましき心地す。猫は、(5)まだよく人にもなつかぬにや、(6)綱いと長くつきたりけるを、(7)物にひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこじろふほどに、(8)御簾のそばいとあらはに引き上げられたるを(9)とみに引きなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々も心あわたたしげにて、もの怖ぢしたるけはひどもなり。
>
> 几帳の際すこし入りたるほどに、袿姿にて立ちたまへる人あり。階より西の二の間の東のそばなれば、(10)紛れどころもなくあらはに見入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまた重なりたるけぢめはなやかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。御髪の裾までけざやか

なお、これは藤原実資の『小右記』（長保元年九月十九日）にも「内裏の御猫、子を産む。女院、左大臣、右大臣産養の事有り。～猫の乳母馬命婦～」と、女院（詮子）や左大臣（道長）が、宮中で生まれた子猫に産養を行い、子猫の乳母として馬命婦が任じられたと記録されている。

12）『古今著聞集』巻20「宰相中将の乳母が飼猫の事」にも「其猫たかさ一尺、力のつよくて綱をきりければ、つなぐこともなくて、はなち飼けり」と記されており、当時は猫を屋内に繋ぎ飼いしていたようである。

www.kci.go.kr

に見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、(11)七八寸ばかりぞあまりたまへる。(12)御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそばめ、いひ知らず(13)あてに(14)らうたげなり。夕影なれば、さやかならず奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。鞠に身をなぐる若君達の、花の散るを惜しみもあへぬけしきどもを見るとて、人々、あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫のいたくなけば、見返りたまへる面もちもてなしなど、いとおいらかにて、若くうつくしの人やとふと見えたり。 (中略)

わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうばしくて(15)らうたげにうちなくも(16)なつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。 (若菜上4-p.140)

御几帳をだらしなく部屋の隅に片寄せて、すぐ傍に女房がいそうな気のするところへ、小さい唐猫を大きな猫が追いかけてきて、急に御簾の下から走り出たので、女房たちは騒ぎ立てて身じろぎし、動き回る様子や衣擦れの音がうるさいほどに思われる。猫は、まだ人によくなついていないのか、長い綱がつけてあるが、それが物に引っ掛かり、まつわりついたので、逃げようと引っ張るうちに、御簾の端が内部がはっきり見えるほどに引き開けられてしまう。すぐに直そうとする人もなく、柱の傍にいた女房たちも慌てて、手も出せずに怖がっている。

几帳から少し奥まったあたりに袿姿で立っている人がいる。階段から二つ目の柱間の東端なので、すっかり見通すことができる。紅梅襲で、濃い色と薄い色が幾重にも重なった色の変化も華やかで、まるで冊子の小口のように見え、桜襲の織物の細長なのであろう。御髪が裾まではっきり見えるのは、糸を縒りかけたように後ろに引かれており、髪の裾が切りそろえてあるのはとても可愛らしく、身の丈よりも七、八寸ほど長い。着物の裾が長く余って、ほっそりと小柄で、体つきや髪の振りかかっている横顔は上品で可憐である。夕方の薄明りで、奥の方が暗いのは残念である。蹴鞠に熱中する若君達の、花の散るのも惜しまぬ様子を見ようと、女房たちは丸見えになっていることに気がつかない。猫がひどく鳴くので、振り返った顔付きや態度などが、若く可愛い人だと柏木は直感する。

柏木はやるせない心の慰めに猫を抱きしめるが、移り香も芳ばしく、可愛らしい声で鳴くのも、猫が慕わしい女三の宮のように思われるとは、何とも好色がましいことである。

この垣間見の場面は、あたかも唐猫と女三の宮が同化したかのように語られている[13]。先ず、唐猫と女三の宮の容貌である。唐猫は、(1)「唐猫のいと小さくをかしげなるを」と、小さく可愛らしいが、女三の宮も「いと御衣がちに、身もなくあえかなり」 (若菜上4-p.73) と、着物に埋まってしまう程に小柄である。また女三の宮は、(13)「あてに」と、上品で優雅に見えるが、舶来の唐猫も上品で高級なペットである。しかも両者とも、(14)「ろうたげなり」とか、(15)「らうたげに」とかのように、繰り返し「ろうたし」という語で形容されている。この「ろうたし」という語は「こちらが何かと世話をしていたわってやりたい気持にかられる。また、そういう気持にさせるような相手のさま」[14]という意味であ

13) 葛綿正一氏は「いたるところでテクストは、女三の宮から猫へ、猫から女三の宮へという連続変化を肯定している」と述べている。前掲書、p.180

14) 『日本国語大辞典』小学館、1976
鈴木日出男編『源氏物語ハンドブック』 (三省堂、1998、p.192) には、「可憐だ、愛らしい、の意。弱いもの、劣ったものをかばってやりたいと思う気持ち」とある。

www.kci.go.kr

るが、唐猫は一貫して「ろうたし」と描写されており、女三の宮も降嫁から出家に至るまで何度も「ろうたし」と形容されている15)。更に、唐猫は、(6)「綱いと長くつきたりける」と、長い綱につながれて飼われているが、それは女三の宮の、(11)「七八寸ばかりぞあまりたまへる」と、身の丈よりも七八寸程後ろに引いている長い髪や、(12)「御衣の裾がちに」と、小柄ゆえに裾を長く引いている様子などと共通している。

しかも、このような容貌だけでなく、両者は行動や状況にも共通点が見い出せる。例えば唐猫は、(3)「にはかに御簾のつまより走り出づるに」と、突然御簾から走り出るところを柏木に見られるが、女三の宮も、(10)「紛れどころもなくあらはに見入れらる。」と、唐猫とほぼ同時に露に柏木に姿をさらしてしまう。また唐猫は、(5)「まだよく人にもなつかぬにや」と、まだよく人になついていないが、女三の宮も六条院に降嫁してから一年ばかりで、まだそこでの生活に充分慣れていないものと思われる16)。

このような理由から、女三の宮が唐猫に変貌したものとして、この垣間見の場面を読むと、小さくて可愛らしい唐猫を追いかける、(2)「すこし大きなる猫」は、正妻として降嫁した若い女三の宮のことを快からず思っている紫の上と見ることもできるし17)、或いは後に密通を謀った柏木と見ることもできよう。また唐猫は、(7)「物にひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこじろふほどに」と、御簾に引っ掛かって巻きついた綱から逃れようとするが、その様子は柏木との密通から逃れようとする女三の宮の姿を想像させる18)。

このように垣間見の場面では、女三の宮と唐猫のイメージが重複しており、まるで女三の宮が唐猫と成って走りぬけるような描写ぶりであるが、実はそれだけではなく、垣間見の前に起こった女三の宮の降嫁事件や、後に起こる柏木との密通事件なども暗示していると読み解くこともできる。例えば、(2)「すこし大きなる猫」を柏木として見ると、その大きな猫が小さな唐猫を追いかけることは、後に起こる

---

15) 例えば、女三の宮は「いとらうたげに幼きさまにて」（若菜上4-p.73）とか、「らうたきやうなれど」（若菜上4-p.143）と描写されており、密通の場面でも「いとあはれにらうたげなり」（若菜下4-p.224）とか、「なつかしくらうたげに」（若菜下4-p.225）とかと描写されている。唐猫も「いとらうたくおぼえて」（若菜下4-p.157）とか、「いとらうたげになけば」（若菜下4-p.158）とか、「らうたげになくを」（若菜下4-p.158）と描写されている。
河添房江氏は「唐猫のイメージは、女三の宮のような高貴な女性が飼うにふさわしい、小さくて高級なペットといったものである」としている。（『源氏物語と東アジア世界』日本放送出版協会、2007、p.231）

16) 女三の宮が六条院に輿入れしたのは、前年の二月で、約一年一ヶ月前である。
父の朱雀院は「唐土の后の飾りを思しやりて、うるわしくことごとしく、輝くばかり調へさせたまへり」（若菜上4-p.42）と、女三の宮の裳着を唐物の調度で盛大に催し、女三の宮の輿入れの際に、それら唐物が六条院に運ばれるが、唐猫もその一つと推測される。

17) 島内景二氏は「小さな唐猫は女三の宮、それをいじめる大きな猫は女三の宮を快からず思っている紫の上の比喩と解しうる」としている。前掲書、p.335

18) 女三の宮は柏木が近づくや、気が動転して恐ろしくなり、人を呼ぶが近くには誰もおらず、「わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色」（若菜下-p.224）と、わなわなと震えて、汗も水のように流れて、気を失わんばかりの面持ちであった。

www.kci.go.kr

密通事件の暗示と見ることができるし、(4)「人々おびえ騒ぎてよそよそと身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしがましき心地す」と、唐猫が御簾から走り出て、女房たちが驚いて動きまわる気配や衣擦れの音がうるさいというのは、女三の宮の降嫁という六条院の秩序を、特に正妻である紫の上の地位を脅かす事態に、紫の上や伺候する女房たちが動揺する様子と類似していると言えよう。女三の宮の降嫁に際して、光源氏は「まだきに騒ぎて、あいなきもの恨みしたまふな」（若菜上4-p.53）と、騒ぎ立てて嫉妬をしないようにと紫の上に言い聞かせるが、紫の上は「人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど」（若菜上4-p.54）と、世間の物笑いになることを怖れつつ、「対の上も事にふれて、ただにも思されぬ世のありさまなり」（若菜上4-p.62）と、何かにつけて平静ではいられなく、伺候する女房たちも「おのがじしうち語らひ嘆かしげなるを」（若菜上4-p.66）と、めいめいに話し合って嘆くのである。

また、(8)「御簾のそばいとあらはに引き上げられたる」と、御簾が内部がはっきり見えるくらいに引き上げられ、(10)「紛れどころもなくあらはに見入れらる」と、露に見られたというのは、物語文学において、垣間見、即ち「見る」ことは、「所有する」ことを意味するところから[19]、これは後の柏木との密通を暗示していると言える。更に、(9)「とみに引きなほす人もなし」と、引き上げられた御簾をすぐに直そうとする人がいなかったと言うのは、密通を事前に防ごうとしたり、密通の後始末をしようとした人がいなかったことを示していよう。

夕霧の咳払いで、女三の宮は奥に引き込み、引き上がった御簾は直される。女三の宮への恋しさを鎮めようとした柏木が、唐猫を招き寄せて抱きあげると、女三の宮の移り香も芳しく、可愛らしい声で鳴くので、(16)「なつかしく思ひよそへらるる」と、柏木は唐猫が女三の宮その人のように思わずにはいられなかった[20]。

この後、柏木は女三の宮への叶わぬ思いに煩悶し、せめてもの慰めにと唐猫を借り受けて、女三の宮の形代として愛玩する。柏木の情念は女三の宮から猫へと移ったのである。そして姉の落葉の宮を妻に迎えるが、女三の宮への執着を絶ちきれない柏木は、六年後、葵祭の御禊の前日に小侍従の手引きで女三の宮と通じる。その逢瀬の最中にも、唐猫は姿を現わす。

> ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫のいとらうたげにうちなきて来たるを、この宮に奉らむとてわが率て来たると思しきを、何しに奉りつらむと思ふほどにおどろきて、いかに見えつるならむと思ふ。（若菜下4-p.226）

柏木が少しうとうとすると、夢の中に手なずけていた猫が鳴きながら近づいて来る。柏木は女三の

19) 保戸塚朗氏は「物語における『垣間見』には、『見ること＝所有すること』という神話的発想が色濃く残っており、男による女のかいま見は、『見る者』と『見られる者』の複雑な心理を描きつつ、恋物語の始発を形づくるうえで重要なモチーフとなる」としている。「かいまみ」（『王朝語辞典』東京大学出版会、2000、p.99）

20) 河添房江氏は「最初の垣間見では、見るという視覚だったのが、ここでは抱くという触覚、宮の移り香がはっきりと匂うという嗅覚や、鳴き声を聞くという聴覚まで広がり、まさに柏木の全感覚を揺さぶりながら、宮と唐猫が同化し、柏木の情念を掻きたてていく」としている。前掲書、p.234

www.kci.go.kr

宮に返そうとして連れてきたのだが、何のために返したのだろうと考えているうちに目が覚める。そして何故こんな夢を見たのだろうと思う。

古注釈書『岷江入楚』は、『細流抄』の「懐妊の事也」を引きつつ、「獣ヲ夢ミルハ懐胎ノ相也」と、獣の夢は懐妊の予兆であると解釈しており、事実、女三の宮は柏木の子をみごもる。柏木は何故唐猫を返したのか、夢の意味が分からなかったが、形代である唐猫を女三の宮に返したということは、密通が成就した今、現実の女三の宮に逢えたので、もはや形代は必要なくなったことを意味していよう。

5．夕顔・浮舟と狐

狐は古くから日本全土に棲息しており、人里にしばしば出没し、狡猾でよく人を騙す動物とされてきた21)。何か不思議な出来事が起こると、人々は狐の仕業ではないかと疑ったのである。例えば『和名類聚抄』には「孫面曰、狐能二当妖怪一、至二百歳一化当レ女者也」と、狐はよく妖怪になり、百歳になると女に化けるとある。また『万葉集』には狐を詠んだ歌が一首だけあり、長忌寸意吉麻呂は「さし鍋に湯沸かせ子ども櫟津の檜橋より来む狐に浴むさむ」（巻16-3824）と、鍋に沸かした湯を狐に浴びせると歌に詠んだ。狐を忌み嫌う歌人の気持ちが窺える歌である22)。

反面、狐は瑞獣としても珍重されたようで、『延喜式』（21・治部）では、「白狐」や「玄狐」（赤みを帯びた黒い狐）、「九尾狐」などが祥瑞としてあげられている。例えば『続日本紀』には、霊亀元年正月に遠江国から、また養老五年正月に甲斐国から「白狐」が朝廷に献上され、和銅五年七月には、伊賀国から「玄狐」が献上されたことが記されている。後になって、狐は稲荷大明神の使いで、稲荷を信ずると狐が功徳を授けると信じるようになり、遂には、稲荷大明神そのものが狐であると信仰するに至るのである23)。

『日本霊異記』（上「狐を妻として子を生ましめし縁」）には、「狐」の語の語源説話が記されており、「来て寝よ」が「岐都禰」となり、やがて「狐」となったというのである。また『今昔物語集』には変化の物としての狐の話が少なからず記されており、例えば、巻16「備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七」は、人間と狐との婚姻と出産、そしてその破綻の話であり、巻27「高陽川狐変女乗馬尻語四十一」は、人間に化けて失敗した狐妖の話、巻20「染殿后為天宮被嬈乱

21）ここから「狐につままれる」という言葉ができた。

22）梶島孝雄氏は、この歌には「狐を妖獣と見なす気持が伺える」と述べ、「狐が人を化かすという言い伝えは中国伝来のものである」として、『本朝続文粋』所収の大江匡房の「狐媚記」を挙げている。『資料日本動物史』八坂書房、2002、p.535

23）志村有弘氏は「京都、伏見稲荷大社の創立が、伊賀国から朝廷に玄狐が献じられた一年前の和銅四年というのも、霊狐信仰が成立して行く過程をうかがわせるものがある」としている。「狐」（『国文学　古典文学動物誌』学灯社、1994.10、p.14）

www.kci.go.kr

語第七」は、染殿后に老狐がとりつく話である。『宇治拾遺物語』の「狐人に憑きてしとぎ食事」も物の怪となった狐が人にとりつく話である。

近世に仮名草子『安倍晴明物語』や、説経節『信太妻』として語り伝えられた話は、安倍安名が狐を助けたら、狐が人間の女性となって安名と契り、子をもうけ、その子が陰陽師として有名な安倍晴明だという内容であり[24]、室町時代の怪物退治談『玉藻前物語』は、天竺や唐土から飛来した妖狐が美女に化現して、鳥羽上皇に寵愛される話である。美女は鳥羽院から「玉藻の前」という名を与えられたが、陰陽師の安部泰成に正体を見破られて逃げ去り、那須野で殺されて「殺生石」と化し、やがて玄翁和尚が法力で石を打ち砕くという話である。

『源氏物語』では、光源氏が夕顔の宿に通う場面や、荒廃した某の院で物の怪が夕顔を取り殺す場面、横川の僧都が宇治院で怪しきものを発見する場面などで「狐」が語られている。先ず、夕顔の宿の場面から見てみることにする。光源氏は身分が知れないよう、顔も定かには見せず、身をやつして夕顔の元に通う。

> いとことさらめきて、御装束をもやつれたる狩の御衣を奉り、さまを変へ、顔をもほの見せたまはず、夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどしたまへば、昔ありけん(1)物の変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど、 (略)
>
> 「いざ、いと心やすき所にて、のどかに聞こえん」など語らひたまへば、「なほあやしう。かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」といと若びて言へば、げにとほほ笑まれたまひて、「げに、(2)いづれか狐なるらんな。(3)ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。 (夕顔1-pp.153～154)

光源氏はわざと装束も粗末な狩衣を着て、身なりを変えて、顔も見せずに、夜更けに人が寝静まるのを待ってから出入りするので、昔話によくある物の変化めいていて、夕顔は気味が悪かったけれど、「気兼のいらない所でゆっくり話そう」と光源氏が誘うと、「やはり変です。普通とは違うもてなしだから、怖いのです」と子供じみた返事なので、それもそうだと笑顔になって、「どちらが狐だろうか。とにかく私に化かされていなさい」と光源氏が優しく言うと、夕顔もすっかりその気になってしまう。

(1)「物の変化」は、人間以外のものが人間の姿になって現れたもので、三輪山伝説などの神婚説話の例があるが[25]、夕顔は、身分を明かさずに人目を避けて通ってくる男に対して、昔の伝承に出てくる「物の変化」のような印象を抱き、気味悪がるのである。そして光源氏が気兼のいらない場所に移ろうと誘うと、夕顔は、光源氏の尋常ではないこれまでの行動から、誘いを怖がる。すると光源氏は、(2)「いづれか狐なるらんな」と、お互いの身分を秘しての逢瀬を「狐の化かし合い」に喩え[26]、(3)「ただはかられたまへかし」と、自分に化かされてついてくるようにと誘う。夕顔は、正体の

24) 折口信夫氏は、この説話が室町期にすでに形を整えていたものとしている。「信太妻の話」 (『折口信夫全集』2、中央公論社、1955)

25) 三輪山伝説 (『古事記』崇神天皇) は、大物主神を祀ってその祟りを鎮めた大田田根子が、大物主神と活玉依毘売の神婚によって生まれた子の子孫であることを語る話である。

www.kci.go.kr

分からない男に連れ出されてもいいとさえ思うようになる。

このように夕顔は人目を避けて通ってくる光源氏を、物の変化かと思い、光源氏は夕顔とのお互い身分を隠しての逢瀬を、狐の化かし合いに喩えるのである。光源氏も夕顔も、あたかも狐に成ったかのように相手を化かしつつ逢瀬を続けるのである。

次は、廃院で物の怪が夕顔を取り殺す場面である。夕顔は、廃院の荒れた門に生い茂った忍草や、うっそうと茂った木立の景観に、不吉な運命を予感して脅える。

> そのわたり近きなにがしの院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。（略）いといたく荒れて、人目もなくはるばると見わたされて、木立いと疎ましくもの古りたり。（略）
>
> 宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上に(1)いとをかしげなる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。(2)物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり。（略）
>
> 帰り入りて探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつ伏し臥したり。「こはなぞ、あなもの狂ほしのもの怖ぢや。荒れたる所は、(3)狐などやうのものの人おびやかさんとて、け恐ろしう思はするならん。まろあれば、さやうのものにはおどされじ」とて引き起こしたまふ。（略）
>
> 引き動かしたまへど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、(4)物にけどられぬるなめりと、せむ方なき心地したまふ。（夕顔1-pp.159～166）

近くにある某の院に着いて、番人を呼び出す間、荒れ果てた門に軒忍が茂っているのが見上げられ、言いようもなく木深い闇をつくっている。まったく荒れ果てていて、人影もなく遠くまで見渡され、木立は気味の悪いくらい古びている。

宵を過ぎたころ、うとうとすると、枕元に美しい女が座って「私が立派な方と慕っているのに、訪ねようともせず、このように別段のこともない女を連れて可愛がるとは、実に心外で恨めしく思います」と言って、傍の女を引き起こそうとする、と夢を見る。何かの物に襲われるような気がして目覚めると、灯火も消えている。

部屋に戻って手探りしてみると、夕顔はそのまま臥していて、右近は傍らにうつ伏している。「どうしたのだ。馬鹿馬鹿しい恐がりようではないか。こういう荒れた所では狐のようなものが人を脅かそうとするのだ。私がいる以上、そんなものには脅かされないぞ」と言って右近を引き起こす。

夕顔を揺すってみたが、ぐったりして正気も失せている様子なので、ひどく子供っぽい人だから、物の怪に気を奪われてしまったのだろうと、手の下しようのない気持である。

光源氏が少しうとうとすると、枕元に、(1)「いとをかしげなる女ゐて」と、とても美しい女が現れて、夕顔を引き起こそうとする。その時光源氏は、(2)「物に襲はるる心地」と、物の怪に襲われるような

26）狐が、妖狐として、美女に変じて男を惑わすものであることは、中国の文献において早くから見られ（『玄中記』『捜神記』など）、特に唐代伝記『任氏伝』と夕顔巻との密接な関わりが指摘されている。『源氏物語の鑑賞と基礎知識』8、至文堂、2002、p.87

www.kci.go.kr

気がして目覚める。そして(3)「狐などやうのものの人おびやかさんとて」と、狐などといったものが人を脅かそうとしているのだと思う。夕顔を揺すってみたが、ぐったりしているので、(4)「物にけどられぬるなめり」と、物の怪に正気を奪われたと思う。

物語の作者は、荒れ果てた院の妖しさを描きながら、光源氏には感じさせなかったが、夕顔には荒廃した院の妖気を感じさせ、不吉な運命を予感させ、脅えさせた27)。また枕元に現れた女には、六条御息所でもあり、かつ廃院の物の怪でもあるという二重のイメージを与えつつ28)、光源氏には、狐の仕業ではないかと思わせた。それは「狐が人をたぶらかす」という当時の認識が反映している。

その後、夕顔の四十九日の葬儀を終えた光源氏は、夢に夕顔と枕元の女が現れるや、「荒れたりし所に棲みけんものの我に見入れけんたよりに、かくなりぬることと思し出づるにも、ゆゆしくなん」（夕顔1-p.194）と、廃院に棲む物の怪の仕業だったと推定する。

最後に、横川の僧都が宇治院で怪しきものを発見する場面である。薫と匂宮という二人の貴公子の板挟みとなった浮舟は、宇治川に入水を図る。一方、僧都は山籠もりしていたが、初瀬詣での帰途に母が発病したので、下山し、宇治院で浮舟を発見する。

> まづ、僧都渡りたまふ。いといたく荒れて、恐ろしげなる所かなと見たまひて、「(1)大徳たち、経読め」などのたまふ。 (略)
>
> 森かと見ゆる木の下を、疎ましげのわたりやと見入れたるに、白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と、立ちとまりて、灯を明くなして見れば、もののゐたる姿なり。(2)「狐の変化したる。憎し。見あらはさむ」とて、一人はいますこし歩みよる。いま一人は、「あな用な。(3)よからぬ物ならむ」と言ひて、さやうの物退くべき印を作りつつ、さすがになほまもる。 (略)
>
> 「(4)狐の人に変化するとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり」とて、わざと下りておはす。 (略)
>
> 心にさるべき真言を読み印を作りてこころみるに、しるくや思ふらん、「これは人なり。さらに非常のけしからぬ物にあらず。寄りて問へ。亡くなりたる人にはあらぬこそあめれ。もし死にたる人を棄てたりけるが、蘇りたるか」と言ふ。「何のさる人をか、この院の中に棄てはべらむ。たとひ、まことに人なりとも、(5)狐、木霊やうのものの、あざむきて取りもて来たるにこそはべらめ。いと不便にもはべりけるかな。穢らひあるべき所にこそはべめれ」と言ひて、ありつる宿守の男を呼ぶ。 (略)
>
> 「(6)狐の仕まつるなり。この木のもとになん、時々あやしきわざしはべる。 (略) 」「(7)狐は、さこそは人をおびやかせど、事にもあらぬ奴」と言ふさま、いと馴れたり。 (略)
>
> 僧都、「さらば、さやうの物のしたるわざか、なほよく見よ」とて、このもの怖ぢせぬ法師を寄せたれば、「(8)鬼か、神か、狐か、木霊か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ。名のりたまへ、名のりたまへ」と、衣をとりて引けば、顔をひき入れていよいよ泣く。
>
> (手習6-pp.281～284)

先ず、僧都が宇治院に出向く。ひどく荒れていて、恐ろしい所だと思い、「大徳たち、経を読

27) 死を予感した夕顔は「もの恐ろしうすごげに思ひたれば」（夕顔1-p.160）とか、「奥の方は暗うものむつかし」（夕顔1-p.163）とか、「物をいと恐ろしと思ひたるさま」（夕顔1-p.163）とかと、次第に恐怖感を増していった。

28) 新編日本古典文学全集の頭注（夕顔1-p.164）は「怪異の正体は、後の源氏の推定や夕顔と御息所との人間関係からみて、廃院に住む妖物とするべきだろうが、前後の文章は、故意に読者が妖物に御息所のイメージを重ねて受け取るように書かれている」としている。

www.kci.go.kr

め」と言う。

森のように見える木陰を、気味の悪い所だと覗き込むと、白い物が広がっているのが見える。「あれは何だ」と、立ち止まって灯を明るくして見ると、何かがいる様子である。「狐が化けたのだ。憎い奴。正体を暴いてやるぞ」と言って、一人の僧が歩み寄る。もう一人は「やめなさい。たちの良くない化け物だ」と言って、物の怪を退散させる印を結びながら、見つめている。

僧都は「狐が人に化けるとは昔から聞いているが、まだ見たことがない」と言って、わざわざ寝殿から下りてくる。

心の中で呪文を唱え、印を結んで様子を見ているうちに、見極めがついたのか、僧都は「これは人間だ。決して怪しい魔物ではない。傍に寄って尋ねてみよ。死人ではないようだ。或いは死人を棄てておいたのが生き返ったのかもしれない」と言う。弟子の僧は「どうして死人を院の中に捨てたりしましょうか。たとえ人だとしても、狐や木霊のような物がたぶらかして連れてきたのでしょう。まったく縁起の悪いことです。穢れに触れる恐れがあります」と言って、番人の男を呼ぶ。

番人は「狐がしたのでしょう。この木の下で時々悪さをします」と言い、「狐はそうやって人を脅かしはするが、たわいのない奴で」と言い、とても慣れきった様子である。

僧都は「それでは、そのような狐の仕業かどうか、よく見定めよ」と言って、この物怖じしない法師を近づけると、「鬼か、神か、狐か、木霊か。これほどの高名な験者がいるのだから、正体を隠すことはできまい。名を名乗れ、名を名乗れ」と、衣をつかんで引っ張ると、女は顔を衣の中に隠してますます泣く。

ある僧は木陰にいる白いものを、(2)「狐の変化したる」と、狐の化けたものだと思い、別の僧は、(3)「よからぬ物ならむ」と、たちの悪い魔物だと思う。知らせを聞いた僧都は、(4)「狐の人に変化するとは昔より聞けど」と、狐が人に化けるとは昔から聞いていたが[29]、まだ見たことがないと言って見に来る。

僧都は印を結び、真言を唱えつつ様子を見守る。もし白い物が物の怪であるならば、正体を現わすはずであったが、何の変化もない。僧都が、白い物が人間であると見極めるや、ある僧は、(5)「狐、木霊やうのものの、あざむきて取りもて来たるにこそはべらめ」と、狐や木霊がたぶらかして連れてきたのだろうと語る[30]。番人も、(6)「狐の仕まつるなり」と、狐がだまして連れてきたと語りつつ、(7)「狐は、さこそは人をおびやかせど、事にもあらぬ奴」と、狐はたいした奴ではないと平然としている。そして僧都が、本当に狐の仕業かどうか確認するために、物怖じしない僧を近づけると、その僧は、(8)「鬼か、神か、狐か、木霊か」と叫びながら、女の着物をつかんで引っぱり、女はますます泣く。この女こそ宇治で失踪した浮舟である。

白い物が出現する直前、荒廃した宇治院に妖気を感じた僧都は、(1)「大徳たち、経読め」

29) 新編日本古典文学全集の付録（『源氏物語』6、p.419）は、『日本霊異記』上巻「狐ヲ妻トシテ子ヲ生マシメシ話」、『今昔物語集』巻16-17話「備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語」と、巻27-38話「狐変女形値幡磨安高語」、『扶桑略記』寛平八年九月二十二日条の『善家秘記』逸文、大江匡房『狐媚記』、『白氏文集』巻4「古キ塚ノ狐」、『捜神記』巻7などを挙げている。

30) 木霊は樹木に宿る精霊のことで、ここでは狐とともに木霊も人を欺くものとして挙げられている。

www.kci.go.kr

と、妖怪を追い払うため、僧たちに経を読ませる。ここでも作者は、夕顔巻の廃院のように、魔物が出現しやすい怪しい雰囲気を準備したのである。最初、僧都一行は白い物を、狐の変化ではないかと疑い、それが人間であると判明するや、狐がだまして連れてきたと思う。ここにも「狐が人に化ける」、或いは「狐が人をたぶらかす」という当時の認識が反映している。

このように狐の場合は、雀や唐猫のように、実際の動物も登場していないし、作中人物が動物に変貌したようにも描かれていない。しかし、光源氏と夕顔は、あたかも狐になったかのように、相手を化かしつつ逢瀬を続けているし、光源氏は、狐が夕顔を取り殺したと思う。また僧都一行は、白い物を、最初狐の変化かと疑い、それが人間と判明するや、狐がだまして連れてきたと思う。ここでの狐は、亡き常陸宮の荒廃した邸「もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて」（蓬生 1-p.327）のように、廃院や宇治院の怪奇さを助長しており、物語の作者は、荒れ果てた様子や作中人物の恐怖心を描写することによって、狐や魔物などが出現しそうな雰囲気作りを念入りに行なっている。

6．おわりに

『源氏物語』に見える動物たち、特に、雀と猫、狐について考察した結果、次のことが分かった。先ず、若紫巻の垣間見の場面は、紫の君と雀の子は容貌や境遇が類似しており、あたかも紫の君と雀が同化したかのごとく描かれている。しかも雀を、紫の君が変貌したものとして見ると、紫の君が現在置かれている状況や、二条院に迎えられた事件など、後に起こる出来事を暗示していると読み解くことができる。

次に、若菜上巻の垣間見の場面では、唐猫が物語を展開させる契機となっているばかりではなく、唐猫と女三の宮の間には多くの共通点が見い出せるところから、まるで女三の宮と唐猫が同化したかのごとく描かれている。しかも唐猫を、女三の宮が変貌したものとして見ると、先の六条院を揺さぶった女三の宮の降嫁事件や、柏木との密通事件など、後に起こる事件を暗示していると読み解くことができる。

このように二つの垣間見の場面は、人と動物が同化し、過去や現在、未来の物語を比喩的に暗示していると読み取ることができるのであるが、狐は、人が動物に変貌したようには描かれていない。夕顔巻では、光源氏と夕顔は、狐になったかのように相手を化かしつつ逢瀬を続け、光源氏は狐が夕顔を取り殺したと思う。また手習巻では、僧都一行は、白い物を狐の変化かと疑い、それが人間であると分かるや、狐がだまして連れてきたと思う。物語の作者は、何れの場面においても、狐が出現しそうな妖しい雰囲気作りを念入りに行なっている。

www.kci.go.kr

【参考文献】

新編日本古典文学全集『源氏物語』1～6、小学館、1994
『源氏物語の鑑賞と基礎知識』1～43、至文堂、1998
新編日本古典文学全集『日本書紀』３、小学館、1998
日本古典文学全集『万葉集』小学館、1973
日本古典文学全集『枕草子』小学館、1974
新日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店、1989
新日本古典文学大系『拾遺和歌集』岩波書店、1990
新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』岩波書店、1994
新日本古典文学大系『古事談　続古事談』岩波書店、2005
新日本古典文学大系『続日本紀』1・2、岩波書店、1989
新日本古典文学大系『今昔物語集』1～５、岩波書店、1999
片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』角川書店、1983
『国文学　古典文学動物誌』学灯社、1994.10
秋山虔他編『源氏物語図典』小学館、1997
秋山虔他編『源氏物語必携事典』角川書店、1998
鈴木日出男編『源氏物語ハンドブック』三省堂、1998
高嶋和子『源氏物語動物考』国研出版、1999
秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会、2000
寺山宏『和漢古典文学動物考』八坂書房、2002
林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房、2002
梶島孝雄『資料日本動物史』八坂書房、2002
河添房江『源氏物語と東アジア世界』日本放送出版協会、2007
喜多義男「源氏物語と動物」（『日本文学研究資料叢書　源氏物語Ⅰ』有精堂、1969）
竹岡哲子「源氏物語に於ける動物」（『国文鶴見』6、鶴見女子大学日本文学会、1971.3）
三苫浩輔「源氏物語巻名に見える動物」（『沖縄国際大学文学部紀要・国文学篇』9-2、1981.1）
宮崎荘平「王朝文学に猫を見た」（『国文学』学灯社、1982.9）
葛綿正一「源氏物語の動物」（『源氏物語講座』5、勉誠社、1991）

www.kci.go.kr

要 旨

『源氏物語』には四つの巻名に動物が用いられており、本文には様々な動物が登場する。これら動物は、植物と同じく、場面の情趣を醸し出す重要な要素となっており、作中人物たちの心情にも影響を与えつつ、彼らの心情を象徴的に表している。

本稿では、動物が登場する場面の中でも、特に、人が動物へ、或いは動物が人へと変貌したように読みとれる場面として、若紫巻の紫の君と雀、若菜上巻の女三の宮と唐猫について、それに夕顔巻の夕顔と狐、手習巻の浮舟と狐についても考察した。

若紫巻では、紫の君と雀が同化したかのように描かれており、しかも雀を、紫の君が変貌したものとして見ると、紫の君が置かれている現況や、後の紫の君が二条院に迎えられる事件などを比喩的に暗示していると読める。また若菜上巻では、唐猫が物語を展開させる契機となっているばかりではなく、女三の宮と唐猫が同化したかのごとく描かれており、しかも唐猫を、女三の宮が変貌したものとして見ると、先の六条院を揺さぶった女三の宮の降嫁事件や、柏木との密通事件など、後に起こる事件をも暗示していると読める。

夕顔巻では、あたかもお互いが狐に成ったかのように、光源氏も夕顔も相手を化かしつつ逢瀬を続け、光源氏は夕顔の死を、狐の仕業ではないかと疑う。また手習巻では、僧都一行は、初めは浮舟を狐の変化ではないかと疑うが、それが人間であると分かるや、狐がだまして連れてきたのだと思う。物語作者は、何れの場面においても、狐が出現しそうな妖しい雰囲気作りを入念に行なっている。

キーワード；動物、雀、唐猫、狐、変貌、同化、暗示

투　　고：2008. 8. 31
1차 심사：2008. 9. 12
2차 심사：2008. 9. 27

www.kci.go.kr